

通読する歌学書、検索する歌学書

梅田 径

Abstract

一 はじめに

本稿では『俊頼髓脳』と鴨長明『無名抄』の諸伝本の比較検討から、類似した性質と書写の様相をもつ作品同士の、諸伝本における形態と書写面の変容について考察し、そこから諸本、特に末流伝本の評価を通じ写本の世代が下ることで、作品の性質が顕現していくことを指摘したい。

ここで対象とする歌学書に限らないが、末流とされる伝本には、古写本からは大きくかけ離れた変容を起す場合がある。本文もさることながら、注意したいのはその書式の変容である。書式の変容には、当該著述の特性の発露という側面もあるのではないか。同じ『古今和歌集』であっても、元永本、清輔本、俊成本がそれぞれ異なる書式をもつように、美術品か、研究用か、証本かといった書写の目的によって、その書写面や書式は大きく異なる。これらの変容は各伝本から見れば書写者の一工夫にすぎないとも言えるだろうが、同質の現象が異なる著述で発生する場合には、書式の変容に傾向が見られるといつてよく、それが享受者にとっては原態よりも優れた形であったとみなすこともできよう。

末流伝本に見える一見大胆に見える改変も、書写者の意図と作品解釈の反映なのである。本文上に大きな価値が見い出せない末流伝本であっても、書写面の変容に注意することで古写本にはない情報の増加や性質が出せる場合もある。

二 『俊頼髓脳』と『無名抄』の書写面の変容

『俊頼髓脳』と『無名抄』は深い関係がある。『俊頼髓脳』は早い段階で流布し、「無名抄」「俊頼の髓脳」などとも呼ばれていた。『俊秘抄』と呼ばれる伝本もあり、書名が固定化されなかつたようである。⁽¹⁾しかしあえて長明が自筆の歌論に『無名抄』と付けた時、両者の形態的な類似から見ても、長明は俊頼の『無名抄』を意識したと推測される。後白河院も『梁塵秘抄口伝集』で『俊頼髓脳』を「まねびて」作るとしており、その影響は非常に強かつた。両書とも諸本論はじめ研究史は厚い。しかし、本稿で重視したいのは善本の認定ではなく、諸伝本の書写面と書式である。いずれも書写の過程で後人の改編が加えられており、その様相は複雑で、具体的に親本から子本への変容を追うことも難しい。

このような改変された本文については従来十分な検討がなされず、『日本歌学大系』の解題をはじめ、多くは「後人のさかしら」と処理され、改変のあり方への注意は等閑視されてきた。しかし、両書の変容の傾向が似通う傾向にあることは早くから知られていた。

『俊頼髓脳』の諸本論は久曾神昇⁽²⁾及び赤瀬知子の網羅的な調査が基盤となる。また今井優⁽⁴⁾、鈴木徳男⁽⁵⁾、伊倉史人⁽⁶⁾らの研究も重要である。久曾神は比較的有力な伝本である甲乙諸本の他に、末流伝本を丙丁戊己類に分類している。甲を定家本、乙を顕昭本とし、丙を顕昭本から一部脱落が見える逸脱本、丁戊己をさらにそこから改変された本(変改本)とした。赤瀬の論では定家

本及び頭昭本の対立があり、さらにそこから抄出本や逸脱本が派生したとされる。従来の議論は定家本と頭昭本の優位を争うものが主流であったが近時、冷泉家時雨亭文庫蔵の定家本『俊頼髓脳』が影印刊行され、古写本が出現した定家本が優勢と考えられる傾向が強い。完本における本文の優劣はひとまず措くとして、久曾神のいう変改本系統に注目したい。

変改本とされる系統の諸本では目次と番号で標目を立てており、より整理された形になっている。こうした標目による整理が行われているが、久曾神は後人によるものとして本文批判への参加の資格なしとした。

俊頼の製作でない事は明確であるが、連歌の終の証歌を三ヶ条に分けて目次を付けてあるのを始め、内容を無視したものが多く、組織の全く分らない人が単なる歌の検索の為に作った事が明瞭であつて、如何に愚なりとはいへ編著者などがなしたものではない。目次は俊頼でなければ能きないように述べてあるが、常識のある人が見れば、如何にしても俊頼以外の何人かが作つたと知られるのであり、その例は長明無名抄にもある。(傍点梅田)⁽⁸⁾

久曾神の指摘は、甲乙系本等では四カ所に分割掲載されている連歌を、変改本では末尾近くに移動しており、さらに目次にはその箇所に「連歌」と付し、内容も不合理で俊頼による原態ではないとする。この指摘は首肯されるべきものであるが、注意すべきはここで長明『無名抄』に同様の現象が起きていることを指摘している点である。⁽⁹⁾

たしかに、原態から大きく離れていることが想定される伝本から、著者自筆本の形態を知ることが難しい。しかし作品が流布していく中で、それらにどのような改変の傾向があるのかという問いをたてるならば、こうした本が持つ価値は計り知れないものになる。

もう一つの問いは、なぜこれらの著述の諸本に類似の現象が生起するのかである。こうした点を考える上で、著述の内容にも注意する必要がある。写本群はどのような変容を蒙りながら構造を編制していくのか。こうした問題意識から、まずは『俊頼髓脳』について見ていこう。

三 『俊頼髓脳』の検索性

『俊頼髓脳』には本文の脱落が大きい伝本もあり、冷泉家時雨亭文庫蔵本『俊秘抄』⁽¹⁰⁾のような抄出本も少なからずあるが、ここでは前節の問題意識にもとづいて、変改本の形態が、どのような機能をもっているのかを論じていきたい。

そのために、まず変改本のような体裁に変わる利点について考察する。変改本系統の松平文庫本『俊頼口伝集』では、目次に項目名と番号を付し、項目に該当する箇所の文頭に数字を書き込む体裁となっている。鈴木は、変改本の内にも項目が百三十二条の本、百三十四条本、百五十七条本、百六十条本が存するとする。久曾神の分類ではこれらが変改本系(丁本・戊本・己本)とされ、赤瀬は略本I類とする。

変改本系統の成立については鈴木が百三十四条本↓百三十二条本(目次と本文の整理)↓百六十条本(本文の混態と増補)↓百五十七条本(百六十条本で本文との対応がない条を整理)という成立過程を想定している。従うべきであろう。目次で立項されるのは話題の内容・登場人物・和歌の初句・被注語等と恣意的で不統一であるが、こうした目次と項目番号との対応により、話題の検索が可能な形に整えられているのが特徴である。定家本を見る限り、『俊頼口伝集』のような「検索」は難しい。『俊頼髓脳』の内容を見ると検索性の付与に対する需要は非常に高かったと考えられる。なぜならば、『俊頼髓脳』は特に前半部分、一定の構成意識を持つていたからである。

まず、「序の意識」である。『俊頼髓脳』の巻頭には『後拾遺和歌集』序との関連がみられることが知られている。『俊頼髓脳全注釈』⁽¹¹⁾では七箇所掲げられるが、集中して五箇所が見える箇所を次にあげる。

春夏秋冬につけて①花をもてあそび、郭公をまち、紅葉を、しみ、雪をおもしろにも思ひ君をいはひ、(中略)そもくうたにあまたのすかたを、わかち、やつ病をしるし、②九のしなをあらはして、いときなき物を、しへ、をろかなる心をさとりしむる物あり、しかはあれと、ならひつたへされはささる事かたく、うかへてまなはされはおほゆる事すくなし、

③むもれ木のむもれて、人にしられさるふしとをたつね、たきのなかれ
になかれて、④すきぬることはのはをあつめてみれば、はまのまさこよ
りもおほく、雨のあしよりもしけし、⑤霞をへたて、春の山にむかひ、
きりにむせひて、秋の、へにのそめるかことき也、山かつのいやしきこ
とはなれと、たつねされは朝のつゆときえうせぬ、玉のうてなのたへな
るみことなれと、きこえされは風のまへのちりとなりぬるにや

『後拾遺和歌集』序

- ①花をもてあそび鳥をあはればずといふことなし。
- ②このしなのやまとうたを撰びて、人にさとし
- ③埋もれ木の隠れぬれど、
- ④浜のまさこの数しらぬまで、家々の言の葉多く積りにけり。
- ⑤山川の流れを見て、水上ゆかしく、霧のうちに梢をのぞみていづれの
うゑ木と知らざるが如し。

このように、書き出しからある部分までが「序」として構成されているこ
とは後代にも意識された。時代は下るが『扶桑拾葉集』に「無名抄序」が収
められ「かくれたる信あれはあらはれたる感あるものをや」までが「序」と
して認識されている。この序が本論に入るための導入となつている点に『俊
頼髓脳』の構成の一端がうかがい知れる。続く話題はこのように書かれる。

哥のすかた、やまひを(さ)るへきこと、あまたのすいなうにみえたれ
とも、き、とをく心かすかにして、つたへきかさらん人はさとるへから
されは、まちかき事のかきりをこまかにしるし申へし

はしめにははんかのすかた

(中略)

次に旋頭哥といふものあり

冒頭に「歌の姿」と「歌病を避けること」を記すと宣言され、「次に○○
といふものあり」として「旋頭歌」「根本歌」「折句歌」「杳冠折句」「廻文の
歌」「短歌」「誹諧歌」「連歌」「隱題」が書かれる。このような「次に」
という詞で分節される一連の歌体は「まちかきことの限り」を記したもので
「次に」といったフレーズは話題を分節する機能を担っている。時代は下る

が『和歌初学抄』における「又」のように接続詞をつかつてトピックを配置
する歌学書があり、こうした接続の詞を配することで項目見出しの代わりの
ように、話題の区切りを作っているのである。

これに続く箇所では歌病についての記述が続いて、その後「おほよそ歌は
……」と別の話題に移動する(新編日本古典文学全集では「四」歌人の範囲」とす
る)。このような点から『俊頼髓脳』の前半の歌体・歌病の記事は「まちか
き事の限り」という一つの知識のパッケージとなつていて、意識して構
想されているとみられる。

以降、『俊頼髓脳』は記事内容が散漫化する傾向があり、難義語への注釈、
物異名など、様々なトピックが書かれるのだが、全体を通じて明確な構成を
意識して書かれたとは考えにくく、話題の配列に規則性もみあたらず特定記
事の検出が難しい。そのような「検索のしにくさ」は、次のような二つの要
因によって引き起こされている。

一つ目は、一つの箇所ですべられるべき話題が複数の箇所でも触れられると
いう「話題の分散」である。一例をあげれば、先ほどみた通り前半部では避
病についての記事があり、そこでは文字の病(同心病や岸樹病)が示されてい
る。ところが、後半部分になつて後悔病についての記事がまた記されるので
ある。

哥の八のやまひの中に、こうくわいのやまひといふやまひあり、哥をす
みやかによみいたして、人にもかたり、かきてもいたして、のちによき
ふしをおもひよりて、かくいはてなとおもひて、くひねたかるをいふな
り、されはなを哥をよまむには、いそくまじきかよきなり、いまたむか
しよりとくよめるにかしこき事なし、

また、似物についても同様のケースが見える。前に「歌には似物といふ事
あり」と語られる一方で、被注歌である「あまの河あさせしら波たどりつ
わたりはてねばあけぞしにける」(三四六)についての記事でも似物詠の記事
が見える。

二つ目は以前の箇所を指示するような「前部参照」の記述が見えること
である。

かせの名はあまたありけなり、おほかたの名は、いしにある物のい名に
しるせり、(傍点梅田)

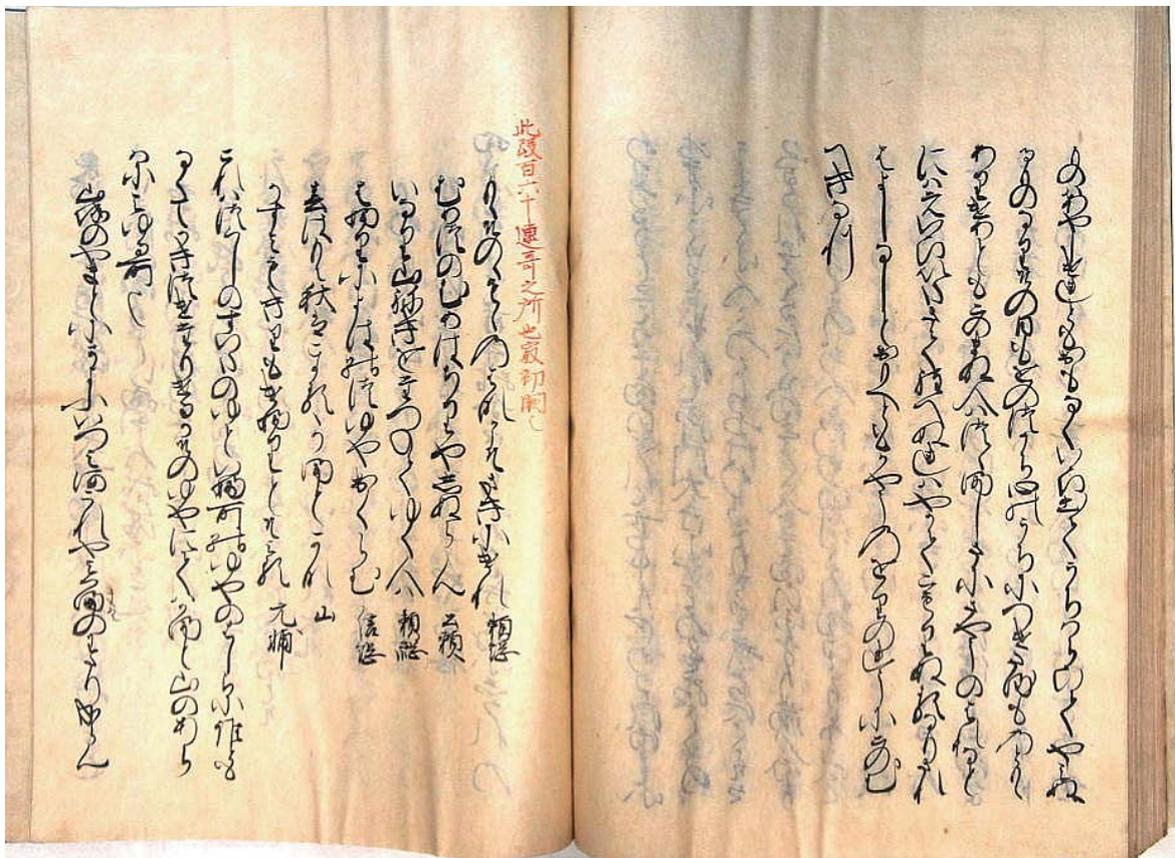
このように「前の話題」を参照し「端にある」話題を再び提示する記述が
みえる。歌字書に限らず、以前のトピックを後方で指し示すことは珍しくな
いが、定家本の形では以前の話題を検出する術がない。二三〇丁を越える定
家本では、これらを検索して見つけ出すのは容易ではないと思われる。

こうした、標目の無い本で前部の箇所を指示する記述があることは、読者
が以前の記事を含めて「よく読み込んでいる」ことを前提として作られてい
ることを示す。つまり、定家本『俊頼髓脳』は書き出しから最後まで一貫し
て読むべき体裁となつているものの「話題の分散」や「前部参照」といった
一書の内部での参照が困難な著述なのである。これは顕昭本の完本でも変わ
らない。

つまり、『俊頼髓脳』は検索しながら読むには不合理な構造であるにも関
わらず、検索を指示する記述がある書物なのである。『俊頼髓脳』は「自在
な構成」をもっている¹³⁾とされるが、一書内での話題のつながりは必ずしも線
条的に(例えば話題の連想や、前後の話題の繋がり)把握できるとは考えにくい。
では、検索に便がある目次を有する諸本は、どのようにそれらを再構成し
ているかを確認していこう。

松平文庫本『俊頼口伝集』は、変改本のうち最大の目次数をもつ百六十条
本の一本である。この百六十条本は、対応する本文を三ヶ条欠く混態増補本
であり、本文の欠脱も存する。目次の立項に際しては統一的な基準はないよ
うで、内容の要約、登場人物、和歌の初句や被注語などの様々な位相がある。
目次と本文との対応については、目次の箇所に項目名を直接書き込むもの
は見えず、行頭に目次の番号を書き込む形となつている。定家本との異同は
甚だしく、物異名部分を後ろに移すもの(静嘉堂文庫蔵岡本保孝手稿本『俊頼口
伝集』)や変改本の特徴である連歌部を末尾に移動させるなどの現象が確認さ
れることはよく知られている。

目次が付されたことで、本文の検索が容易になつただけではなく、各項目
の闕脱箇所が明確になるという利点もあつたことが松平文庫本の書き入れか



松平文庫本『俊頼口伝集』(函架番号一一七・一五)

ら把握できる。松平文庫本には大きな闕脱が数カ所があるが、対応する本文が存しない「三十六不言物名而其意可見、三十七寄所名歌、三十八物異名」の三ヶ条を含め、朱書きで闕脱部分を書き込まれている。図版は末尾に移動された連歌部で、朱で「此改百六十連歌之所也最初闕脱」とある。項目の有無による闕脱部分の推定が書写者によって書き込まれることは珍しく無いが、目次や標目のない諸本ではその分量まで推定することは極めて難しい。こうした後人による「脱落部分の復元」は目次と標目を記す構造の本によって始めて可能になるだろう。

これは、目次や項目による再構成と変改本系統が大幅な本文異同を持つこととを関連づけて考えてもよいように思われる。

乾安代は『俊頼髓脳』が連歌について記す箇所が四箇所存することを指摘し、なかでも集中的に連歌が集められる「連歌集成」箇所の重要性を指摘する⁽¹⁴⁾。もし定家本等の構成を立項・目次化するならば、目次においても連歌部を四つ（以上）作るようになるのではないか。

連歌の箇所を後方に移した変改本は本文に対する検索・利便性の付与だけではなく目次の錯雑を嫌って本文を移動させたと思われる。

さらに、それぞれ百三十四条本から百三十二条本へ、百六十条本から百五十七条本へとといった目次と本文との対応に關わる整理が行われていることも本文と目次の対応に高い需要があったことを示している、たしかに、「変改本」系統の本文は百三十四条本の段階から、それ以前の本（久曾神のいう内本の闕脱を有していたらしく、本文的に見るべき点は少ない。しかしながら、話題をより簡便にするための書式が模索され、目次を持たない古写本のもつ不合理さを解消しようとしていたことで、原態の「通読する本」とは異なった性質を持たせていることは注意に値する。

四 『無名抄』の書式改編

目次と標目を付す伝本と、それらが全くない伝本が存するという点では長明『無名抄』も類似の現象を示している。

本文上にも大幅な改変が施される『俊頼髓脳』諸本と異なり、『無名抄』

では諸本で記事内容が大幅に異なることはなく、諸本の差異は目次や標目などの本文以外の形態的な点が多い。

伝本のうち写本は『国書総目録』で四〇本、版本の伝存例はさらに多く、非常に多くの異本が現存する。これらの諸本のうち、本文上には大きな相違は見受けられない場合であっても、標目の書式は諸本で大きく異なることが従来指摘されてきた⁽¹⁵⁾。少し長いが引用したい。

本書（梅田注・天理本）は七六の項目に分け、それぞれが見出し標目されて記述されているが、伝本によってその項目名に差異があり、項目数も出入がある。また、①全く見出し項目がなく本文中に朱鉤して各段を示すもの（書院部藏鷹司本明應和調抄、江戸中期写）、②おなじく各段が改行して書かれているもの（静嘉堂文庫藏脇坂八雲軒旧藏松井文庫本無名抄、江戸中期写）、③各段のはじめに行間書入れの形で細字で標目するもの（東京大学総合図書館藏阿波国文庫本無名抄、江戸中期写）、④本書のように本文中に一行をとって標目するが見出しは朱書でなされるもの（梅沢記念館藏無名抄、鎌倉期写本）、⑤本書と同じく別行で本文と同筆で墨書するもの（天理大学藏呉氏旧藏無名抄、鎌倉末期写）、⑥本文中に見出し標目はないが巻初に項目の目録を掲げるもの（蓬左文庫藏無名抄、室町期写）、⑦本文中の別行標目と目録の両者を持つもの（寛政二年・文化九年・無刊記版本無名抄）等の形態的な差異をもっている。このことは、恐らく伝写間の段階的な展開を示すものであらうと思われる。⁽¹⁶⁾〔注：○番号は梅田〕

長明『無名抄』は本文上大きな異同等では比較的少なく、書式や項目名・巻数等を含めた「形態上の違い」がその大きな差異であると考えられてきた。この中でも注意したいのは項目表記のあり方で、右の引用においても七類あることが指摘される。

古写本としては梅沢本、天理本、呉旧藏本（現在は天理大学図書館蔵）が鎌倉期の書写と見られる。梅沢本などは朱書で項目を示し、成立後比較的早い段階から項目を付すことが行われてきたようである。梅沢本をみる限りでは、墨書の本文の空行の間に、各項目は朱鉤朱書きで記されることが多い。この空行まで含めて書写されることを意識していたように見え、梅沢本で項

目が付されたわけではなく、以前から項目が存していた可能性は高い。天理本は項目名が事書になることが多く(六一項)、梅沢本(四八項)よりも項目見出しが整理されている。天理本は二字ほど空格をおいた位置に、本文と同行に項目見出しを書くのであるが、詞書にあたる語(後徳大寺左府ノ御哥二)や「頼政御哥二」といった文)も二字文の空格をおいて記す。これらの字下げ箇所も和歌の書式に合わせた話題の切れ目と意識していた可能性があると思われる。

ところが、梅沢本等の章段分けは本文の構成に対して立項が不合理な箇所がある。一つをあげれば、「俊恵定歌体事」「名所を取る様」「取古歌(梅沢本では「新古今」とする)」をまたぐ部分がある。「俊恵定歌体事」は長文の章段で、途中「歌には故実の体といふことあり。良き風情を思ひ得ぬ時、心の巧みにてつくりたつべいやふを習ふなり」として、以降「一つには」と歌体を列記・説明する。ところが、次のように二項目分がその途中に立項されるようになってしまう。

歌には故実の体といふことあり。

一には、させる事なけれど、たゞ詞つゞきにほひ深くいひながしつれば、よろしくきこゆ。

一には、古歌の詞のわりなきを取りてをかしくいひなせる、又をかし。

一には、秀句ならねど、たゞ詞づかひおもしろく続けつれば、又見どころあり。

〔取名所取様〕

一には、名所を取るに故実あり。

〔取古歌・新古今〕

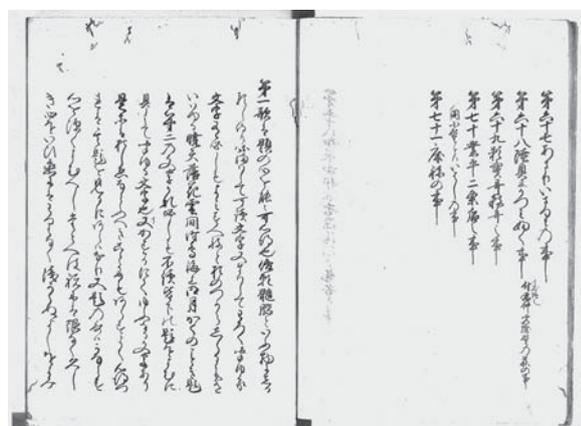
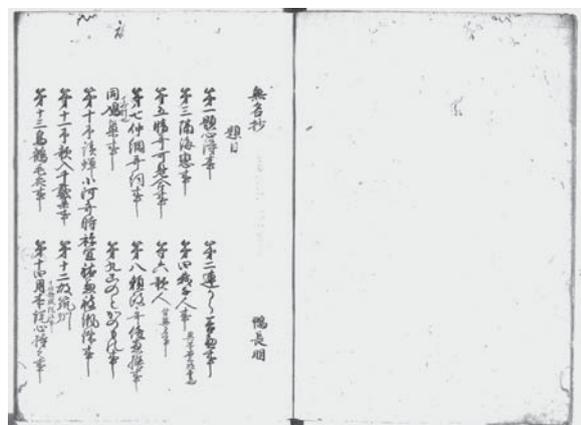
一には、古歌を取る事又やうあり。

右は和歌・説明を省いたものだが、こうみると五つの「一つには」の箇所は「故実の体」の一群と読んだ方が合理的であろう。天理本では「には」は字母も同じものを使い、書写者は明らかに一連の記述と見なしているものと考えられる。斎藤理子は弘安七年奥書の見える書陵部蔵松岡本が梅沢本他に比べて章段設定に合理性があることを指摘しているが、この箇所の問題は松

岡本も同様である。だが、書陵部本『明応和歌集』等の項目表記のない諸本では一連の記述として読むことができる。従来は右のような例を含め梅沢本や天理本の章段分けをそのまま利用してきた傾向があるが、他の写本ではこうした点に古写本とは異なる処理がなされていることに注意したい。

河野美術館蔵『無名抄』(三三三・六四〇)は、本文中に章段名はほとんど書かれず、項目の位置に朱点と朱合点を付して項目を記す、先の解題の部分でいえば項目処理は①の垂種の形であるが、該本がユニークなのはこうした鉤や合点に複数の種類の種類が存する点である。さらに、二箇所の「一つ書き」と、鉤のみ・あるいは点のみの項目表記も混在しているなど、項目表記のあり方に複数の位相が存している。

たとえば、梅沢本で「俊恵定歌体事」とある章段には、朱点及び朱合点を付すが、「木工頭の歌に」の箇所にも合点を付し、さらに「歌には故実の体といふことあり」の箇所にも合点を付している。「名所を取る様」と「取古歌」の箇所には合点等はなく、ここは「歌の故実」の一群として標目したもので



河野美術館蔵『無名抄』(函架番号三三二・六三四)

あろう。

他例では、同じく河野美術館蔵『無名抄』¹⁹に、目次に「第〇〇」と記し、「第七十一床寝の事」までの七十一箇条が立項される。その中には複数の項目が同一の条に「付」として挿入された見え「イ別條也」と校合がなされた記述が見える。それらが見える条を挙げると以下の通りである。

第四十四哥つくるへは兼藤感事（イニナシ私） 付静縁こけ哥之事（イニ別條之）

第四十七哥人不可得証事（イニ前同條也） 付十二歳女子判哥事（イ前

條） 同依余喜自然哥誦事（イ前條也） 同範兼家会優事（イ前條也）

第五十四道因歌志深事 付大輔小侍従事（イニ前條也）

第六十近代哥躰事 付代々哥躰事 同幽玄事 同哥躰俊恵定ル事（イ前

條也） 同譬詞於立石事（イ前條也） 同貫之千鳥哥事 同哥之詞聞能

様二可誦事（イ前條）

第六十三名所誦様之事 付定家朝臣難する哥之事（イニ前條也）

第六十五かな序書様事 付清輔朝臣能書事（イニ前條也）

第六十八陸奥にかつみふく事 付為仲宮城野の萩の事（イニ前條也）

これら「付」以下の、異本では前条という注記は全十二箇所に見える。当該書では目次の連番が本文の行頭に漢数字で示される点から、『俊頼口伝集』と類似した書式となっていることにも注意される。

二本を見たに過ぎないが、『無名抄』の項目表記に関する書写者たちの模索は近世期に至っても統一した見解はなく、章談分けの項目出入りが確認され、書式の模索が行われていたのである。

しかし、朱点・朱書といった比較的単純な標目だけではなく、河野本二点の如く連番が付された諸本が生まれ、項目の分立や表記に関して多様な模索が試みられたことはやはり注意してよいと思われる。版本の類とは異なる形でも様々な立項の仕方が試みられていたのである。また、梅沢本・天理本・呉本といった古写本の標目に本文との対応が悪い箇所が見えることから、『無名抄』の検索に対する需要は極めて早い段階から存していたらしい。梅沢本などの古写本が注目される『無名抄』であるが、近世期の写本まで含め

てみると、実に様々な読み方が模索されていたことがうかがい知れる。

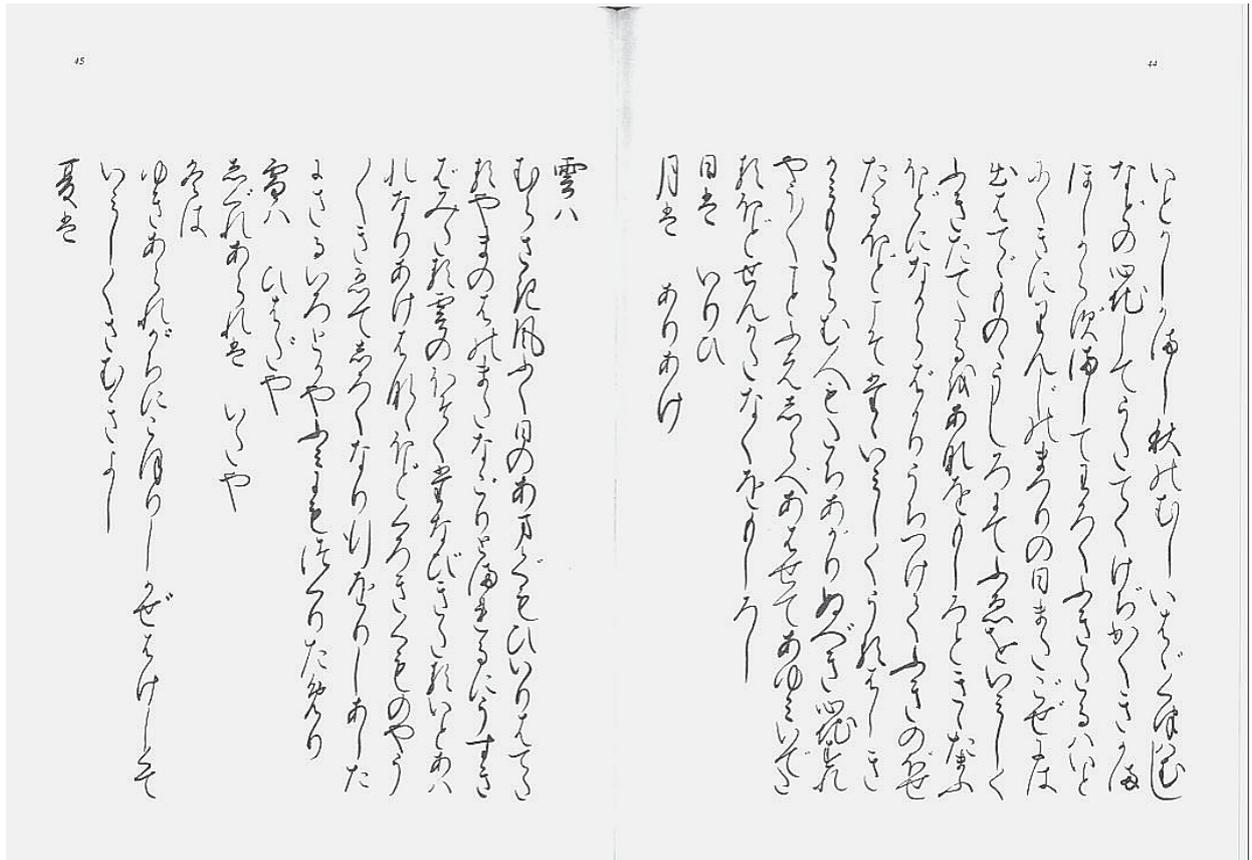
五 歌学書の書式からわかること

『俊頼髓脳』や『無名抄』の原態では恐らく通読を想定していたものの、その後検索性を高めるために項目や目次が付与されるという現象が諸本で見られることを確認してきた。しかし、その項目や目次のあり方は諸本を通じて一貫するものではなく、伝本ごとに様々な書式が採用されている。同時に、内容を示す章段や目次の項目条数は安定せずに増補や抄出、整理がなされるなど、非常に不安定であることは共通する現象とみてよい。目次や項目には本文ほど強い拘束力はなく、より便利な書式や項目名が模索されてきたのである。

通読に適した書式と検索利便性の高い書式を併存させる例は他にも見られる。

例えば、能因本『枕草子』では、随想的な章段では地の文が改行もなされずに続くが、類聚的章段などでは「日は いりひ／月は ありあけ」のように一字分の空格をあける歌枕書のような書式となる。他の章段では改行が行われるものの、はつきり標目を立てるわけではない。同書の歌枕書的な性格を強調した書式であるとも言えようか。書写の際の書式の変更は、その本のある稿者は、以前『和歌初学抄』の諸伝本について同質の指摘を行ったことがある²¹。おそらく原態では、いくつかの項目を明示していなかった諸本に対して、増補本系の諸本では目次にあるすべての項目の位置を示して、辞書のようにも使えるようにしていた。

また、書写面の体裁は各本の性質を示すだけではなく、著述のジャンルを決める一つの要素と考えられてきた。古典籍における和歌の書様は多様である。田村悦子は散文における和歌の書式を五類に分けて紹介しており、それらが漢籍や仏典などの影響を受けながら、ジャンルごとに異なる書式が採用されていることを指摘している²²。歌集では詞書を字下げ（凸型）、和歌を詞書きよりも字上げして表記される一方、同じ歌集でも詞書きが字上げ、和歌が



富岡家旧蔵能因本『枕草紙』二五二段

字下げ（凹型）される場合には、散文（歌日記や物語）などに近い性質のものとして読まれていた。両方の書式で書かれた『建礼門院右京大夫集』の例もあり、同じ内容であっても歌集として読まれる場合も散文として読まれる場合もあった。また、装釘や料紙といった物理的な側面も書物の性格をある程度規定する²³。同様の現象は歌集や日記だけではない。加藤昌嘉は源氏物語諸本で和歌の書式が複数存することを紹介している²⁴。和歌の書式は同一の内容の本においても多様性が生じうる。さらには詞書や作者、左注などといった他の諸要素との関連で決定される。本文中の和歌の書式のみからジャンルを——そもそも「ジャンル」自体が恣意的な分類であるが——決めることはできないのである。

歌学書の場合も同様である。木下が報告するとおり、『無名抄』でも諸本で和歌二行書きで字下げが行われる本もあれば、和歌を他の行に対して字上げを行う本もある²⁵。ただ、歌学書の場合は和歌に物語や歌集とは異なる機能が与えられている。

『俊頼髓脳』や『無名抄』のような通読する歌学書での和歌は著述内の目印になるのである。例えば、『俊頼髓脳』が青谿書屋本『土佐日記』のようにわずかに歌の末尾一字をあけるような和歌の書式を採用していたとしたら、被注歌と証歌の弁別が困難となり、歌学書としての視認性は大幅に低下するだろう。『俊頼髓脳』の後半や『奥義抄』のように被注歌が多い書では、和歌それ自体が検索上の目印となっている。

また和歌の書式は、一書の中でも複数存する。『奥義抄』の写本でも多くは和歌二行書きが多いが、慶應義塾図書館蔵本（『日本歌学大系』底本）では和歌は一行書きながら、本文は和歌行頭から五字ほども下げて書かれる。しかし、被注歌ではない本文中に書かれる証歌は被注語から三字ほど下げられ、逆に地の文に対しては一字ほど上げて書かれているのである。被注歌と証歌で文頭の高さが異なる現象は大東急記念文庫本などにも見られるが、それを強く強調した書式といえよう。

顕昭『袖中抄』の冷泉時雨亭文庫蔵本及び高松宮家旧蔵本では天二地一の界線が引かれ、自説と他説とを明示するように空格を調整している。南北朝

期や江戸期に継がれた部分ではこの書式が守られていないが、複雑かつ合理的な体裁であり、著者自身の手によるとみてよい²⁶。

このように歌学書は著者や書写者が内容に合わせつつ、それぞれ異なった書式を採用するため、複雑なものが多い。書式の設定は著者自身による場合もあれば、書写者による操作の場合もあり、原態が保持され続けることは少なく書式は不定形である。こうした諸写本の現象から、物語や仮名日記のように冒頭から結尾へと一方向にのみ読まれる本に比べて、歌学書では書式のもつ意味が重く、本文中に和歌や項目をはじめとする複雑な要素を持ち、書写者が書写に際して諸要素を操作すること（空格の設定や書式の制定など）が重要であったことがうかがえる。書式の意味を読み解くことは、その本文の性格を該本の書写者がどのように理解したかを把握するために重要なのである。

六 おわりに

原態から遠く離れた末流の伝本は本文上の問題も多く、久曾神が「後人のさかしら」「改竄」としてそれらを退けたのも故ないことではない。しかし、書式の改変が、著述の性質の変容に大きな影響を与えていることは正しく把握・評価されるべきであろう。『日本歌学大系』自体、底本の書式や体裁、文字などを大幅に変更していることが知られている²⁷。印刷物においては技術的な制約によって写本のような多様で複雑な字配りは再現しにくく、底本に比較して安定した（より理想に近い）紙面になるように操作しているため、活字の印刷物に頼るだけでは「写本」の持つ多様な情報を見逃してしまう。

写本の体裁や書写のあり方に注意する研究はまだ多いとはいえないが、各写本それぞれの世界を読みとることには大きな意味があるだろう。今野真二は写本の書式に注意し、誤写を含めた享受の位相に目を向けることを提言している²⁸。これは物語研究において加藤昌嘉が写本ごとに異なる物語世界を読み取ろうとする研究²⁹とも共有されうる問題意識だと思われる。内容面だけでなく、各書式や体裁、書写の様相について考察することの意味は小さくない。

書写行為は単純な複製ではない、創造的な行為でもある。だが、その事を実感するのは難しい。諸伝本を尋ねてみれば、素朴な歴史実証主義的な文献学的立場に立った場合に低い評価を与えざるを得ない本がある事には、誰しも気づかずにはいられないだろう。書誌学的・文献学的な蓄積は多く、また重要である。しかし、その一方で、原作者の「原態」や諸本の「祖系」に一步でも近づこうと目指すばかりでは、³⁰現存する多くの写本「群」を無視してしまっていることに目を向けるべきである。

本稿では『俊頼髓脳』と『無名抄』を中心に、比較的顧みられることの少ない末流伝本も含めた諸本全体に目を向け、その項目や目次などの、変容を蒙りやすい要素を分析してきた。著述における著者自身の思想内容だけではなく、「享受者による操作」を含めた、諸本伝流の広がりのおかげで写本を検討することを通じて、従来扱われることの少なかった古典籍を文化資本として再構成することができないか考える。

歌学書の書式は作品ごとに大きく異なり、また一書の異本の中にも複数の書式が存する。だが、歌学書に限って言えば書写が重ねられていく過程で合理性が追求される傾向があるとみなせる。書式が一定しにくいため、目的に応じて変容しやすい部分を多くもっていたとも言えるだろう。書式に注目することで、その書物の性質を本文の良し悪しとは別の位相から、則ち「享受者がどのように読んできたのか」、「どのような性質が注目される本であったのか」を理解することができるのである。

【付記】

和歌・歌番号は『新編国歌大観』によった。『俊頼髓脳』は冷泉家時雨亭叢書によった。長明『無名抄』は『歌論歌学集成』によった。画像は河野美術館本『無名抄』は国文学研究資料館より提供された紙焼写真を使い、松平文庫本『俊頼無名抄』は著者撮影の写真を使用した。能因本『枕草紙』は柿谷雄三、山本和明編『能因本枕草子 富岡家旧蔵』（和泉書院、一九九八）によった。引用本文には私に句読点を付した。関係資料所蔵諸機関に篤く御礼申し上げる。

注

(1) 藤原俊成『古来風体抄』では「俊頼朝臣口伝」と見えるが、顕昭『袖中抄』では

- 「無名抄」と記される。『八雲御抄』「学書」には「俊頼無名抄」とある。
- (2) 久曾神昇「俊頼抄について」(『国語と国文学』一六一三、一九二九・三)、同『日本歌学大系 第一巻』解題。
- (3) 赤瀬知子「院政期以後の歌学書と歌枕 享受史的視点から」(清文堂出版、二〇〇六)。
- (4) 今井優「俊秘抄序説」(『追手門学院大学文学部紀要』一一、一九七七・一二)、同「俊秘抄」伝来諸本の原型推考(大阪大学、『語文』四八、一九八七・二)。
- (5) 鈴木徳男「俊頼髓腦の研究」(思文閣出版、二〇〇六・三)。
- (6) 伊倉史人「俊頼髓腦」の題詠論について(『三田国文』二四、一九九六・一二)。
- (7) 『冷泉家時雨亭叢書 79巻 俊頼髓腦』(朝日新聞出版、二〇〇八)。
- (8) 久曾神前掲論文。
- (9) 久曾神昇「長明無名抄について」(『立命館文学』四一・二、一九三七・一二)。
- (10) 前掲「冷泉家時雨亭叢書 俊頼髓腦」に収載。
- (11) 福田亮雄他「俊頼髓腦 全注釈」一〜九(『教育研究』九〇・一七、一九九五・二二〜二〇〇三・一二) 未完。
- (12) 佐藤明浩「和歌初学抄」物名「稲」の窓から(平安文学論究会編『講座平安文学論究 十五輯』、風間書房、二〇〇一)。「和歌初学抄」の各項目が「又」から始まることと、序文にあたる箇所が「又」で区切れることを指摘している。
- (13) 鈴木前掲書。
- (14) 乾安代「俊頼髓腦」の連歌(『国語国文学論集 後藤重郎教授周年退官記念』、一九八四)。「連歌集成」は乾の命名による。
- (15) 久曾神前掲論文。木下華子「無名抄」伝本考(『東京大学国文学論集』五、二〇一〇・三)。
- (16) 『天理大学善本叢書 平安鎌倉歌書集』(天理大学出版部、一九七八)「無名抄」解題。
- (17) 斎藤理子「無名抄」の章段―松岡本『無明抄』を中心に(『いわき明星文学・語学』七、二〇〇一・八)。弘安七年という最古の書写奥書を持つ本である。ただし、松岡本は誤写を多く含み不審もおおい。
- (18) 今治市河野美術館蔵『無名抄』(架蔵番号…三三三二・六四〇)。国文学研究資料館所蔵のマイクロフィッシュで閲覧。
- (19) 今治市河野美術館蔵『無名抄』(架蔵番号…三三三二・六三四)。国文学研究資料館所蔵のマイクロフィッシュで閲覧。
- (20) 林和比古「枕草子の研究 増補版」(右文書院、一九七九)では、「清少の原著では、類集段の提示部を常に改行したとは言へないのではあるまいか。清少は類集段提示部がある時は改行書に、ある時は追込書に、気まぐれに書いたのではないかと推測される。それが伝写の手によつて漸次改行書に変へられた。而してその原著の追込書の形式が三条西本に24%という頻度となつて残つたと考へたいのである」(二

二四頁)と述べている。三条西家旧蔵本、富岡家旧蔵本ともに原態からは離れた形であるが、このような変容を起こす読まれ方として、類集段の辞書的・歌枕書的使用が考えられよう。

- (21) 拙稿「遷移する歌学書―『和歌初学抄』を中心に―」(『人文学の正午』四、二〇一二・七)。
- (22) 田村悦子「散文(物語、草子類 中における和歌の書式について」(『美術研究』三一七、東京国立文化財研究所、一九八一・七)。
- (23) ハルオ・シラネ他編『世界にひらく和歌 言語・共同体・ジェンダー』(勉誠出版、二〇一二)「第五部 物質文化とメディア」所収の論文に詳しい。
- (24) 加藤昌嘉「揺れ動く『源氏物語』」(勉誠出版、二〇一一)。
- (25) 木下前掲論文。
- (26) 『冷泉家時雨亭叢書 袖中抄』(朝日新聞社、二〇〇三・六)。「貴重典籍叢書 国立歴史民俗博物館蔵 文学篇」二二巻〜二四巻(臨川書店、一九九九)。解題参照。
- (27) 佐々木孝浩「元禄八年板『和歌庭訓』本文の素性―『日本歌学大系』の底本を考へる」(『芸文研究』一〇一一、二〇一一・一二)。
- (28) 今野真二「日本語の考古学」(岩波書店、二〇一四)。
- (29) 加藤前掲書。同『源氏物語 前後左右』(勉誠出版、二〇一四)。
- (30) 橋本不美男「原典をめざして―古典文学のための書誌」(笠間書院、一九七八)等。

A New Perspective on the Evolution of Poetry Criticism Text Manuscripts

Kei UMEDA

Abstract

This paper examines the texts of the *Toshiyori Zuinō* (Toshiyori's Essentials of Poetry, by Minamoto no Toshiyori) and the *Mumyōshō* (Untitled Notes, by Kamo no Chōmei). Specifically, this paper examines how copies of this text, both hand copies and printed manuscripts, shifted and changed from generation to generation and publishing to publishing. Later copies and editions of the text feature the addition of tables of contents, as well as section headings, neither of which would have been present in the works as written by their original authors. Modern philology has taken these additions to be superfluous alterations to the original text. However, unlike other textual alterations such as miscopies or corruptions, the addition of section headings and tables of contents add to the searchability and usability of a text. This paper exams these two texts from this perspective, and seeks to give new meaning to latter day copies of the texts.